

第1章 戦場

榎太からの引き上げ②

引き揚げ船に魚雷が！

柳澤一枝さんのお話から

○落合 表紙裏地図

○えん麦 イネ科の一年生または二年生作物。おかゆ状に煮て、温かい牛乳と砂糖をかけて食べるオートミールとして食用とするが、主に馬などの飼料として重要。

○配給 米や味噌、砂糖等の食べ物などの物資を、生活の必要に応じ、平等に割り当てて配る制度。砂糖・マッチの切符製の導入が最初。米については、昭和十六年（一九四一年）に始まった。

○大泊 表紙裏地図

○軍艦 海軍の艦艇で、戦闘力をもつもの。戦艦・巡洋艦・航空母艦・潜水母艦・水上機母艦・砲艦などをいう。

昭和十六年（一九四一年）、私たちの家は小樽から榎太の東海岸にある落合に移住しました。榎太に行ったのは自分たちで食べ物をつくって食べることが目的でした。私の父は小樽市役所に勤めていましたが、そうしなければ子どもを成長させられないと考え、決めたようです。私は十四才でしたが、兄弟はみんな小さかったです。妹が一歳半で、その次が三歳半で、その次が一年生でしたから五歳半、その上が四年生です。子供五人と両親、七人で移住しました。榎太では、牛や豚を飼っていました。米が採れない所なので、麦や食料えん麦などを作っていました。それを配給のお米と混ぜたもの、肉や野菜など、弟や妹たちにおなかいっぱい食べさせることができました。本当にあの三年間は私の人生の中では幸せだったと思います。しかし、終戦時、ソ連軍が攻めてきました。八月十七日、女、子どもはみんな北海道に帰らせることになりました。父とは離れ離れになりました。

十七日に家を出て、十九日までは大泊の港付近の野原で寝ました。大泊の港の方に行くと、私たちより二日、三日早く、終戦とともに逃げている人たちがいて、だれもない家がたまにあるのです。でも、何もかもそのまま置いてありますから、私たちはそういう所に行つてご飯を炊かせてもらったりしました。

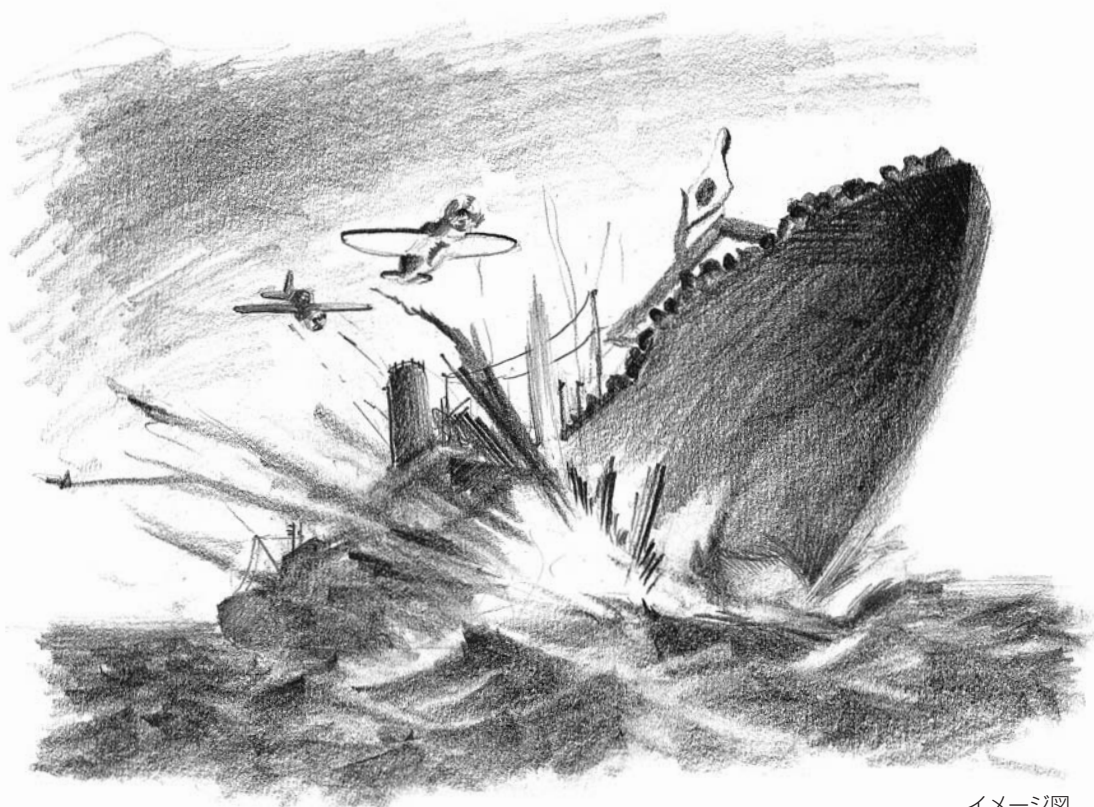
十九日の夕方、船に乗りました。港には、小笠原丸、泰東丸、そして私たちが乗った軍艦の第二新興丸の三隻がいました。船は自分で選んだのではなく、待っている順番で決まりました。軍艦なんて何か嫌だなど思いながら乗りました。乗ると、疲れ果てているし、おなかはす

○機関 いろいろなエネルギーギーを、機械的エネルギーに変換して他へ送る装置。原動機。発動機エンジン。

○魚雷 海戦兵器の一つ。艦艇や航空機から発射し、水中を自走して敵の艦船を撃沈させるもの。

いているし、俵の上に座ったのですが、すぐにぐっすり寝てしまいました。目が覚めてしばらくすると、水兵が「ご飯が炊けました。みんなでおにぎり一つずつでも食べましょう。だから、おにぎりを握ってください」と言いました。私は、妹がまだ三歳でしたから、背負ったままです。「ええっ、おにぎりですか」という感じで私が立ち上がるのと、兵隊さんがびっくりして、「あっ、お子さんがいらっしやる人はいいです。お子さんがいない人だけです。」と言われて、座りました。そして、おにぎりを握りに機関部の向こう側に行った人のお尻が見えなくなつたなと思つたその時に、魚雷です。魚雷を撃たれました。船が浮き上がったと思つたらダーンと落ちたのです。軍艦なので、沈没はしなかつたのです。大きな軍艦ですから、浮かんでいました。真

引き揚げ船に魚雷が！



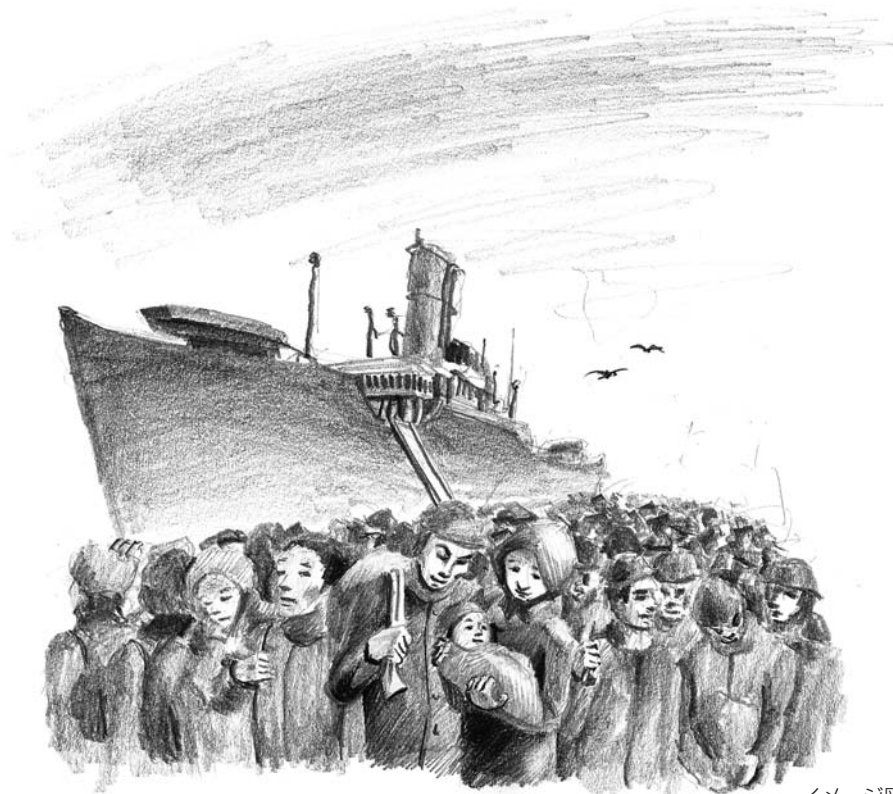
イメージ図

攻撃される引き揚げ船

ん中の機関部は壊れなかったのですが、前だけが飛んでいました。一緒だった小笠原丸と泰東丸は沈められました。

おにぎりを握りに行った人たちは二十歳前後の若い人たち十二、三人です。その人たちが炊事場に入る前に飛んでしまったのです。これからいろいろと幸せなことがあるはずのお姉さんたちが、全部死んでしまいました。後でおける時に軍艦の中を見て歩くと、底の厚い鉄が全部割れていました。死んだ人の遺体の一部がありました。そういう恐ろしいところを見てしまいました。魚雷というのはそれほど恐ろしいものなのです。

魚雷を撃たれたすぐ後に飛行機が二機来しました。低空飛行で、甲板に上がっている人たちを次々に撃っていったのです。私は弟、妹に「動いたらだめよ」と言いながら伏せました。頭が一番大事なので弟二人の頭を覆いました。おぶり直す時間がなかったので、妹は背中に背負ったままでした。



イメージ図

からふと
樺太からの引き揚げ

○担架 病人や負傷者を乗せて運ぶ道具。2本の棒の間に人を乗せるための布などを張ったもの。

弟が撃たれました。二発、小豆粒ぐらいの穴が二つ開き、出血したのです。背中から肝臓を貫通したので、すごい出血です。軍医が、「この子は重体だ、担架に乗せなさい」と言われて、乗せるにも、弟は興奮しているの、「乗らない、乗らない。」と言うのです。「先生が寝せろと言っているから」と言っても、「いい、僕は大丈夫。乗らない」と興奮状態でした。弟は命はとりとめました。が、その後もおなかが痛い、おなかが痛いとよく言いました。弟は命と体が弱かったです。しょっちゅうおなかが痛いと言っていました。

軍艦は留萌の沖で攻撃されてからは、ただ浮いているだけでした。その時、漁船が四隻で助けに来て、軍艦を静かに引っ張り、留萌の岸壁にやっとな横付けしたのです。助かりましたが、もう降りるといふときにも気が急ぎました。こうしているうちに沈んでいくかもしれないという気持ちがあったからです。陸に上がったときは本当に感動しました。町内会の人たちがみんな日の丸の旗をもって、「ご苦労さん、お帰りなさい。」と言われるのです。もう目が見えなくなるほど涙がばっと出てきました。私は、こういう経験をしました。北海道に戻ってからは、手稲の祖母の家で生活しました。

戦争はあってはいけないと思いました。何にもしない人たちが殺されるのです。平和というのは、人間が生きるための本場に素晴らしい環境です。ですから子どもたちには、「平和になるためにはどうしたらいいのだろう。」という考えをもつことができるようになってほしいと思います。

DATA

平成20年度南区平和事業

聴き取り

- ・平成21年1月14日
- ・常盤児童会館



柳澤一枝(やなぎさわ・かずえ)さん

- ・昭和2年(1927年)生まれ
- ・札幌市南区在住

引き揚げ船に魚雷が！